

ストイックエピキュリアン

くちびるの迷宮で

篠田しのだ 沙夜さやの唇に、自分の指を触れさせたい。

田井つづらい 美奈子みなこの胸のうち、頭の奥にそんな願望がい

つから芽生えたのか、当の美奈子にもそれはわからない。
ない。

ただ。

気づいたときにはその願いは、願いなどという枠
をはるかに超えた熱の塊となつて、美奈子の中をこ
だまして蠢うごめいて、振り払うこともかなわなくなつて
いた。

篠田 沙夜の——幼馴染の沙夜の唇に、自分の指を、
触れさせたい。

いや、触れさせたいなどというところで、欲求は
とどまってはくれなかった。

唇に触れさせた指先で、そのまま桜色の上唇と下
唇の狭間を押し開いて。ゆっくりと、その中に、唾
液に濡れた内側に、指を、侵入させたい。

指を挿れて、口の中にあるだろうやわらかな唾液
と粘膜を、かき乱したい。あらがおうとする舌を指

の腹で押さえて、無理やりに蹂躪じゆうりんしたい。

してくて、たまらなくて。

自分でも、わからない。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

どうしたら、この気持ち止められる——

いや。

とめることなんて、叶うはずがない。

だから。

どうしたら、

この気持ちを、かな叶えるこ

とができるのだろう。

そう考えても、むろん、筋道などはなく。

円井 美奈子はただ、見つめるほかはない。

切りそろえた長い黒髪。神様が丹念に仕上げた細

工物のような、静かに整った幼馴染の横顔。

せっけん

おろしたての石鹼せっけんのような白くなめらかな肌の中で彩りを帯びた、その、桜色の唇を。

「——美奈子？」

静かな声が、耳をついた。

円井 美奈子は息をのんで、眼鏡の中で目を見開く。

「どうしたの？ 何か変かしら、私——」

白く細い篠田 沙夜の指が、沙夜自身の漆黒の髪を
さらりとかき梳とく。

沙夜は、声と同じでいつも表情は静やかで。けれども、その唇がほんのかすかな笑みを刻むのを、美奈子を見た。

「あ！ ううん！ ぜんぜん！」

座ったまま背筋を伸ばして、しゃちほこばった声をあげる。

両の手のひらが反射的に、机の上を開いた国語のワークブックの両ページをぱしやりと打ってしまい——放課後の図書室に響き渡った音に、美奈子の動揺はさらに広がってしまう。

「ごめん、ちよつと考えごとしちやつててっ」

わたわた、という言葉をそのまま動作にしたかのごとく、ぎこちなさ一〇〇パーセントで姿勢を整え

なおす美奈子を見つめることしばし。

「——そう」

くすりと静かに、沙夜は可笑しそうな微笑を唇に浮かべる。

桜色の、唇。

口紅を塗っているわけではない、ごくごく自然で淡い楚々とした色なのだけど——白磁のように色白な篠田 沙夜の肌の中にあると、その色がなまめかしく、浮かびあがるように思えて。

ほっぺたにかあつと熱が昇つてゆくのを、どうすることもできない。

もう顔は湯気を噴きそうに上気しているのに。とくん、とくん、と、心臓は早いリズムでさらに血を送ろうとする。

おさまれ、おさまれ！ と念じつつ、美奈子は沙夜から逸らしたまなざしを懸命に、両手の指でつかんでひろげた国語のワークブックに向ける。

そこに書かれた日本語は、日本語のはずなのに奇

妙な模様のようになって視界の中を踊りまわって、
ぜんぜんといっつていいくらいに意味を読み取ることが
できない。

美奈子はちらりと、眼鏡越しのままざしを前に向
けた。

昨年改装が終わったばかりだという、中学校の図
書室。自分たちが座っているのは自習コーナーのい
ちばん外周、校庭側に面した窓際のカウンター席だ。

正面の窓にはわたしと、隣の沙夜の姿が映ってい

る。

幸い、英語の教科書に視線を落とした沙夜は、ガラスに反射したわたしの視線には気づかない。

それをいいことに、ちらちらと、けれども全力を込めて見つめてしまう。窓にうかぶ、幼馴染の面立ちを。

幼稚園のころからずっと一緒だった、沙夜ちゃん——
篠田 沙夜。

昔からずっと可愛くて綺麗だと思っていたし、実

際うちのお母さんが「沙夜ちゃんほんと美人さんよ
ねえ——こういう言いかたしていいのかわからない
けど、お人形さんみたい」なんてことを言うのもい
つも耳にして、自分もうなずいている。

ただ、けれども。

そうした言葉をいくつ並べても、こうして目の前
にしている沙夜の相貌を——その、纏まとう空気を言い
あらわすことはできない。

いまこの図書室は静かだけれど、たとえば教室や

街なかのざわめきのなかにいるときでも、沙夜ちゃん
の周り数十センチには絶対的な静けさのヴェール
がはられているように感じられて。

可愛い、という言葉は間違いではないのだけれど、
どこかちがう。

美しい、という言葉も、方向性はあっているけれ
ど、そんな平凡な言いかたであらわせるものでは、
ない。

もしも神様が人間をこしらえるのであれば、篠田

沙夜という作品を創るときには神様はきつと、雑音をいっさい排除した物音ひとつしかないアトリエで、息すらもひそめて繊細に繊細に指を動かしたのだと思う。

吸い込まれるような黒く長い髪と、使うまえの新しい石鹸そのままの白い肌。

まつ毛の長い切れ長の大きな目と、すっ……とまっすぐな鼻筋と、それから、

静やかに結ばれた、淡い淡い紅色の、くちびる。

「！」

身体のどこか奥の筋肉が鋭く締まるような感触に、美奈子は席に座したまま背中をのびあがらせた。

椅子の座面と脚がかすかな軋きみの音をたててしま
い、となりの沙夜ちゃんに気取られたのではないか
とあわてたけれど——幸いというか、沙夜ちゃんは
いつもどおり静かなまなざしをひろげた教科書に落
としているだけだ。

息をとめたまま、美奈子はまなざしを戻す。

机の上にひろげた国語のワークブックではなく
——正面のガラスに映る、自分の顔に。

ゆるく癖のある三つ編みおさげの髪と、制服を着
ていなければ小学生、下手をすると四年生くらいに
見えてしまう目鼻立ち。

すこし前に眼鏡を換えたときに、色とかかたちと
かほんのすこしだけおしゃれなのに挑戦してみよう
かな……！ とか思ったのだけど、結局似合う気が
しなくてこれまでと同じごくごく普通の濃い茶色の

フレームのものを選んでしまった。

そんなこんなで、いちばんプラス志向な言葉を選んでも「おっとりした」あたりの、子供っぽい形容詞しか該当はしないだろう自分のいでたちだ。

もしも隣の家に生まれた幼馴染みでなかったら、こうして沙夜ちゃんの隣に身を置くことだってできなかつた気がする。

これだけだつてとてもとっても幸せなことだつたというのに。

どうしてわたしは、こんな、いけない望みをい
だいでしてしまったのだろうか。

大きくループした美奈子の思考は、そこで振り出
しに戻る。

今日この時間だけではなくって、この一ヶ月、わ
たしは同じ輪の中を巡り続けたままだ。

自分の奥底の、不可思議な熱に気づいてしまった
そのときから――

「美奈子」

静かな声が耳に届いた。

あわわわ、またやっちゃった——！ と美奈子は

背筋のラインをこわばらせる

けれども、今度は沙夜の声に、不思議そうな響きはない。

先ほどとは違ってこっちも沙夜ちゃんではなく目の前のガラス窓を見ていたので、さすがに沙夜ちゃんのことを考えていたのを気どられるはずはなくて。ただ。

「もしかして、すこし具合が悪かったりするかしら」
「——え？」

憂いをはらんだ表情と声に、美奈子は思わずきよとんと目を見開いた。

「美奈子、さつきからほつぺたがのぼせているみたい。
い。

……大丈夫？ 熱とかは、ない？」

「えっ？ え、」

思わず、声が半オクターブうわずってしまふ。

自分の中でぐるぐるしている火照りが、沙夜ちゃんから見てわかるくらい顔に出てしまっていたことの驚きで。

あわてて否定の言葉を口にするよりも早く——のばされた沙夜の指が、ぴとん、と美奈子のおでこに触れた。

心音が、跳ねる。

開いてしまった唇から、呆けた息が洩れた。

さいしよに感じたのは、ひんやりとした冷たさ。

汗ばんだ肌に密着した、沙夜ちゃんの、指、の。
数秒遅れて、ぬくもりがやってきた。

沙夜ちゃんの、指の中にある体温が。私のおでこの熱と交わる。ゆつくりと、染み入ってくるように。

「ううん……すぐく熱がある、という感じではないかしらね。でも、今日はもう帰ろっか。私も、ちようどひとくぎりまで終わったところだから」

まだすこし眉はしかめたまま、こちらのおでこの手のひらもつけたまま、沙夜ちゃんは微笑んだ。

沙夜ちゃんの、顔が、近い、桜色の、唇、が。

「うんっ、ありがと、だいじょうぶだけど、そうだねそろそろ帰ろっか」

だいじょうぶに聞こえないのではないかというしどろもどろな声を発しながら、美奈子は唇に笑みをつくった。笑んでみせたつもりなのだけれど、眼鏡のなかで目が勝手にまたたきを繰り返しかえしてしまう。

指が、沙夜ちゃんの、手がまだおでこに触れていて、

あわ。

こちらをのぞきこんだ沙夜ちゃんの、瞳が鼻が唇が三〇センチの正面にあつて。

このままではほんとに、熱があがってきてしまう。
あわわわわわわわ、わ、わ、あ。



とすん。

と、

つぶらい

みなこ

円井 美奈子は自分の部屋の、勉強机の椅子に腰を落とした。

——だめ、だあ……

天井を仰いで、あお長く細く、息をつく。

沙夜さやちゃんと、沙夜ちゃんのうちの門の前で別れてほんの数分。

お屋敷と称してもいい沙夜ちゃんの家のお隣にある、自宅の二階のいつもの自室。

学校から帰った制服姿から着替えもせず。ほっぺたは、まだかすかに熱を帯びたまま。

そろえたつまさきで床を静かに押し蹴って、事務椅子を一八〇度ターンさせる。三つ編みの髪が揺れ、美奈子は後ろの壁の姿見に向かいあう。

こめかみのあたりからほつれた髪の毛の数本が汗で肌にはりついているのに気づいて、さらに真っ赤になりながら指で除け整える。

ここのとろろずつと変だ変だと感じていたのだけ

れど、今日の自分の様子のおかしさはそれどころではない。

さっきの、沙夜ちゃんとのやりとりと……なにより、おでこに指で触れてもらってしまったからだろうか。

いつもだったら家に帰ってきたらすこしは治まる——夜とかひよんなタイミングでまた入ってしまうこともあるけれど、オンとオフの時間はあるへんてこな熱のスイッチが、数時間ずっと入りっぱなしの

ままだ。

椅子に座ったまま、腰から上だけきをつけをしたような姿勢で、美奈子は息を吐いて吸った。

このまま放っておいたら、おかしくなってしまうそう。

さっきの、正面至近距離の沙夜の顔が、頭の奥に浮かぶ。

しつとりと長い黒髪と、包みをほどいておろした石鹼のような白い肌。

憂いの色を帯びたまなざしと、気遣いの言葉を紡つむいでくれた唇。

唇。

淡い淡い紅桜色の、繊細なふくらみ。その上下のふくらみの狭間はざまに結ばれた、ライン。

あの、溝のライン、を。

美奈子はひとりでに、自分の眼鏡の前へと手をかざしていた。

人さし指が、のびる。

指先に、視界のピントが結ばれる。

この、わたしの指で、沙夜ちゃんあのやわらかな溝を、

なぞることが、

割り広げることが、できたなら――

――？――え、？

「っ、あ、わあああああああ！」

椅子の背もたれから電撃でも流れたような勢いで、美奈子は椅子から跳ね立ちあがった。

わわあ！ わたし、また、こんな！

それも今は、ぼんやりとはなくてはっきりと強く、頭の中で望みを、その中身を言葉と映像にしていた。

妄想に。

耽るなんて穏便なものではなくて……呑みこまれかけていると思う。

眼鏡のレンズの内で潤んだ瞳をさまよわせて、美奈子は立ちすくんだ。

心臓が、暴れて飛びだしそうに中から胸を叩いている。

顔と頭に血がのぼっているのに、貧血めいた立ちくらみがした。

ほうっておくとそのうち自分がばらばらに崩れおちてしまって、かわりに中から現れたむき出しの自分が沙夜ちゃんに襲いかかって、唇に指を伸ばしてしまいそうで。

「落ちつこう！」

鏡の前にげんこつを握り締めて、美奈子はせい
っぱいにきりりと眉をしかめた。

大声をはりあげてしまったけれど、いま家はわた
しひとりなので大丈夫。

落ちつくの、しずまれ、しずまれ、
田井 美奈子。
挙動不審の見本みたいな今日のわたしだっ
たし、
沙夜ちゃんにもいぶかしげには思われてしまっ
たけれど。

まだなにか、決定的におかしなことをしてしまっ

たわけじゃない。

なにか、おかしいことをしてしまいう前に。

わたしのこの、へんてこな欲求に、たづな手綱をかけな

いと。

げんこつからほどいた手のひらを胸にあて、深呼吸をしてひとつうなづく。

部屋のまんなかを横断して、美奈子はベッドの上へと仰向けに倒れこんだ。

むつかしい顔のまま天井を見あげ、すこしずつれて

しまった眼鏡の位置を指で正す。

どうして——わたしは、こんな望みを抱くようになったってしまったのだろうか。

胸の中で言葉にして、問いを刻んだ。

この数週間で幾度も、幾十度も繰り返してきた疑問の一文。

けれども、これは、これまでとは違う。

戸惑いのつぶやきじゃなくて……こっちから、踏み込んでいくための問いかけ。

まずは、把握しなくちゃなのだ。

自分の中にもやもやしたストレスがたまったら、落ち着いてそのもとになる考えの原因を分析してみるといいって、中学校の保健の授業で先生もおっしゃっていた。

もちろん今のわたしのこれは、ストレスというものとはぜんぜん違う。沙夜ちゃんのこととは、頭に思い

描くたびに柔らかな温かさが胸の奥から沁みあがってくる。

わたしは、

円井 美奈子は、篠田 沙夜に、恋を、している。

たいせつな友達であること、幼馴染であることに加えて、それだけではない気持ちはずっと前、中学にあがったころから抱き続けて。

それはもう、わたしの中でも惑いの時期はとうに過ぎて、自覚が完了していることだ。

沙夜ちゃんと、ずうつと一緒でいたい。

静やかな微笑みも、黒く長い髪を梳く指も、すらりと華奢な腕も脚も身体もぜんぶぜんぶ、隣で目にしていたい。

沙夜ちゃんはおしゃべりではないし自分も口下手なのだけれど、沙夜ちゃんとだったら同じ部屋の中にどれだけ長くいつしよに閉じ込められてもいい。

ぎゅつと抱きしめたいし、その、

ちゅー——ええと！ キス、だって、したいって

思う。

ぽばんっ、と、美奈子は仰向けのまま両の手のひらで布団を叩いていた。ひとりでによじらせた身体のおちこちで、制服の生地が擦れる音がする。

おおお落ちついて。

ここまでは、だいじょうぶ、ほかのひとだってたぶん、恋をした相手には思うことだと思う、から。

わたしが考えなくっちゃいけないのは、ここから先。

キスをしたい、唇を重ねたいと思うのと同じくらいかそれ以上に……指で、沙夜ちゃんの唇を触りたい、唇のなかに指を挿し入れたいと思っっているのは、一体どうしてなのかということだ。

そもそもいつからだったのだらう、と記憶をめぐらせてみるけれど、それももうわからない。篠田沙夜に、友達という以上の想いを抱いたのが「いつのまにか」だったのと同じように。今となっては、生まれたときからずっと自分の中にあつた願望のよう

に感じてしまう。ここから辿ろうというアプローチは、ダメだ。

Whenではなくて、Whyに切り替えよう。

どうしてなのか。

キスではなく。

自分の唇ではなくて、指を、

沙夜ちゃんの唇に強く触れさせたいと思うのかと、
考えると。

眩暈めまいのような熱が、頬から眉間を通って、頭の奥

の芯のほうに滲んでゆく。

ベッドの布団のうえでうつぶせになると、美奈子は手を伸ばして、枕元に置いてあったスマートフォンを掴んだ。

布団にくっついた胸が、跳ねるような心音のたかまりを伝えてくる。

同じリズムで息を響かせながら、美奈子はスマートフォンを起動して、指でタップしてゆく。

——わわ、

頭の奥で、自分があわてた声をあげている。

なにをやってるの？　だめ、わたし。

けれども、制止の言葉は身体には、指には届かない。
い。

隠して埋めていた秘密の箱を掘りおこすみたいに、
人差し指がタップを繰り返す。

——そのつ、解析には、ちゃんと、材料が要るか
ら……見ないとだめだからっ……

止めている自分を押し流して、熱を帯びた声が円

井美奈子を操る。

画像閲覧のアプリを起こして、フォルダを奥に奥にたどって――

ひとつのファイルを、呼び起こした。

ほんとは一瞬なのだけど、一分くらいに思える間をおいて、握ったちいさな画面に映像が開く。

屋上。青空と、緑のフェンスを背後にして。

黒いさらさらの長髪と白い肌。きれいという言葉
を女の子のかたちにしたような沙夜ちゃんの顔が、

沙夜ちゃんにしては珍しい、ほんのすこし照れたような微笑みを浮かべている。

沙夜ちゃんを撮った、バストアップの一枚。

撮ったのは、春。二年生の始業式のあとの放課後。

学校では、スマートフォンは緊急時や自宅からの連絡以外のほかは、ポケットから出してはいけないことになっている。その校則をやぶって、「二年生なつた記念だから！ 今日だけだから！」と行って、撮らせてもらった一枚だ。

おそるおそる、二本の指を画面に滑らせて、画像を拡大する。

沙夜ちゃんを撮らせてもらう前に、こっそりこのスマートフォンの設定をいじって。いつもよりもずっと大きい、最大の解像度にカメラをセットしたのだ。

なので、沙夜ちゃんの顔だけが画面にいっぱいになるくらいに大きくしても、写真はぼやけない。長いまつ毛のひとつひとつも、瞳の中の色彩も光も、

繊細に見てとれる。

ふー、ふー、と、自分の唇がへんてこな音を刻んでいるのがわかった。頬はもう茹であがって蒸気を噴く^ふのではないかというくらいのもまっかつかさだ。

もういちど、とりつかれたように指を動かして——
——美奈子はさらに、画面を拡げる。

篠田 沙夜の、面立ちの、下半分。

すうつと通った鼻の起伏の下に、それは、ある。

微かに笑みのかたちにはほころんだ、
うすべにいろ薄紅色の——

くちびる。

自分を、自分の中のなにかをとらえて離してはくれない、ほんの数センチのなかに収まってしまいう繊細な器官。

眼鏡の中で潤うるんだ目を細めて、美奈子は人差し指を立てた。

その先端に、湿って熱い息を吹きつけてから。

写真のなかの親友の顔に、その場所に、近づける。

もう、画像でもいいから、願いをかなえたくて。

スマートフォンはざまの液晶画面に大きく映った桃色と桃色の狭間に、指をあてて、そうつと横になぞり――

ひゅんつ、と、映像が大きく真横に逸れた。

「あ」と目を見ひらく美奈子の眼前。画面にあるのは大写しになった、白い肌の色と髪の毛の黒。沙夜ちゃんの顔の、下側の右半分。

考えてみれば当たり前のことだが、画面をスワイプして、勢いよくスクロールしてしまったのだ。

あまりにも間の抜けた自分の所作に、美奈子はわれに返った。

枕の上にスマートフォンを取り落として、う、と唇を噤む。

自分のなかの欲求のゆえを解き明かすつもりでいたのに、気がつけばまた、わけのわからないことをしてしまっている。

沙夜ちゃんだつてまさか、撮らせてくれた自分の写真がこんなことに使われているなんて思ってもい

ないだろうに。

うしろめたさが、破裂しそうに頭の中で膨らんだ。
なんだか。

沙夜ちゃんの知らないところで、沙夜ちゃんを、
冒^け流して……穢^けしている、ようで。

——とくんっ！——

と、瞬間、ひとときわ大きく跳ね震えた心臓の音。

眼鏡の奥で、美奈子は^{ほうぜん}呆然と目を見開く。

さまよわせた自分の思考の先が、偶然に、何かにか^{かす}掠

め触れた——触れてしまった、気がした。

探していた、問いの答え。けれども、知ってはいけないほんとうのことに。

いま、わたしは画面の中の沙夜ちゃんの唇を指でなぞるのに失敗してしまっただけけれど——画面がスクロールせずに画像の唇をなぞれたとしても、欲求は満たされなかつたろう。

指に本当に唇の感触が得られない、というのもあるけれど。

それ以上に。

画面の中の篠田 沙夜は、いくら唇をなぞって撫でて触つても、表情を変えることはないからだ。

わたし、は。

沙夜ちゃんの唇が、わたしの指で、歪むのを、見たいのかもしれない。

いいや、かもしれないとかじゃなくて——見たい。

桜色の綺麗な唇の狭間はざまに人差し指を押しこんで、

くちゆりと音がするくらいに動かして。

沙夜ちゃんがまなざしを見開いても、頬を染めても、首を横に振っても、とめることはしないで。

開いた歯の間からさらに指を差し込んで、頬を内側から押して、ふくらませたい。

いつも、静やかでどこまでも神聖な沙夜ちゃんの面立ちを、表情を。

わたしの指で、めちやくちやに、乱し、たい。

ベッドに腹ばいになったまま、腰とお尻がひとりでに浮いて、硬く持ちあがった。

もう、ごまかすことなんてできない。

わかってしまったがためにむきだしになってしまった自分の欲望が、胸の奥で暴れている。

と、同時に。

「っ、うっ、うううッ！」

か細くかすれた悲鳴を洩らして、美奈子は眼鏡を外した顔を枕に押しつけた。

先ほど放りだしたスマートフォンが、おでこに触れて、肌にめりこんで痛い。

その痛みは、自分への叱責のよう。

自分のなかに抱いてきた望みは。

沙夜ちゃんの神聖さを、穢けがしたい、穢して、自分だけのものにしてしまいたいというものだったのだろうか。

枕に押しつけた顔がでたらめに熱い。

心臓が時計の秒針の三倍くらいのペースで跳ねて、血を首からうえに集めていく。

罪の意識と、自分の、あさましさへの、どうしよ

うもない恥ずかしさ。

火照^{ほて}った顔じゅうから汗が噴きだして、枕の生地に染みにじんで。汗だけじゃなくて、口から吹いた息の湿りけも、眼からこぼれる涙も。

制服のお尻をあげて四つんばいで枕にしがみついた行儀の悪いかっこうのまま、美奈子は枕に吐息を染みこませる。

自分の都合のいい錯覚、でしかないのだろうか。

わたしの、沙夜ちゃんに恋をしているなんていう、

ほんのりを装ったこの想いも。

薄皮がひとつ剥はがれれば、沙夜ちゃんの綺麗さを穢して、支配して、自分のものにしてしまいたいという、毒々しい欲情があるばかりで。

さっきの、画面の沙夜ちゃんの写真に対してしようとした指でのタッチだったそうだ。

指で画像を拡大して、沙夜ちゃんの唇だけを……顔の下半分だけを、わたしは画面に映し出していた。沙夜ちゃんのまなざしを画面の外に追いやって、視

線を合わせることから逃げるみたいに。

それこそが。

沙夜ちゃんを、篠田 沙夜を友達や幼馴染や恋の相手としてなんかじゃなく、想いの疎通なんてどうでもいい色欲の対象としてみていたことの証拠のようにな気がして。

なによりも——こんなに、消えてなくなってしまう
いたいくらいにうしろめたいのに——わたしの身体
と精神はこころいまも、沙夜ちゃんの唇を指でかき回して、

くちゆくちゆと音をたてて、意のままにする妄想に、興奮してしまっている。

顔を押しあてた枕に、一秒ごとに吹きつける鼻息と唇の吐息が、どうしようもなく熱い。

もう、こんなでは、明日から沙夜ちゃんに顔を合わせる資格なんてない気がするのに。あたりまえだけど、明日はやってきてしまう。

制服に包まれた身体を、ベッドの上でおしつぶされた四つんばいにして。昆虫の蛹のように固まって。

情けない声を漏らしたまま、少女は迷路の中でしやくりあげ続けた。



「出てこられてよかったわ、ほんとうに。昨日の様子だと美奈子、そのまま熱を出してお休みしてしま
いそうだったもの」

屋外テーブルの対面で、沙夜^{さや}は穏やかに微笑んだ。

午後一時の木洩れ陽が、卓の木板と、上に置かれたふたりのお弁当を照らしている。

「……まだすこし、本当の調子ではないかしら」

「えっ？　ううん、ぜんぜんだいじよぶだよ！　どうして？」

どぎまぎするのを隠すこともできずに、美奈子は背筋を硬く伸ばした。

土曜日の、いつもの沙夜ちゃんとの時間。

美奈子^{みなこ}たちの通うこの中学校は、二週間に一度の

割合で土曜日の登校と授業がある。

午前中の四校時で学校は終わりになるのだが、部活動がある生徒たちも多いので——そうではない生徒も含めて、お昼は持ってきたお弁当を校内のいずこかで食べてよい。

美奈子も沙夜も部には所属していないのだが、美奈子の家が帰宅しても昼はひとりなのもあって、沙夜もお弁当を持ってきて食事につきあってくれてから帰るのが常になっていた。

「だって、美奈子、ぜんぜん食べていないじゃない」
桜色の唇は笑みを浮かべたまま、切り揃えた前髪
の下で沙夜ちゃんの眉がかすかに曇る。

木製の屋外テーブルの上、たしかにわたしのお弁
当箱の中身はまだ、ふたつのおにぎりのうちのひと
つが手つかずで、おかずの卵焼きもウィンナーもミ
ニトマトもそのまま残っている。

「そうかな。ごめんね、ちよつとぼうつとしてて」
箸をにぎったまま、美奈子は眼鏡の中でまなざし

をさまよわせた。

笑みをつくってみせたけれど、その口元のラインが自分でもそらぞらしくなってしまうているのがわかる。

昨日のあれから一晩たって、夜もなかなか寝付けなかつたけれどなんとか眠りにはついて——錯乱のようになつていた状態からはすこしは落ちついたけれど。

胸のなか、頭のなかのふたつの感情はおさまらず。

やわやわになつてしまつた円井 美奈子をサンドイッチにしたままだ。

ふたつの、感情。

沙夜に対するとてつもない申し訳なさ、うしろめたさ、消えてしまいたいような恥ずかしさと。

沙夜に対する、その場所に対する、眩暈めまいめいた熱を帯びる欲求は。

「そう——」と、得心がいったというふうではぜんぜんないうなずきをひとつ。考えこんだ表情のまま

まで、沙夜ちゃんは自分のお弁当に指を伸ばす。

ちようどというのか、沙夜ちゃんのお昼は野菜とハムのサンドイッチだった。

そつと両手の指で持った三角形の、その先端の角が沙夜ちゃんの口元に近づく。

凝視ぎょうししているようにはみえないように装いながら、眼鏡のレンズ越しに美奈子の目はひとりでに吸い寄せられてしまう。

まるでスローモーションのように沙夜の唇がかす

かに開き、柔らかなパンの生地先の先がその狭間はざまに入りこむ。桜色の複雑なかたちをした起伏が、すこし、ほんのすこしだけふくらみを歪ませて、品よくパンと具材を挟む。

沙夜はいつも、食べるときにほんのすこしも音をたてない。けれども今日はこのとき、沙夜の唇と啞内こうないのたてる湿った微音が、幻聴めいて耳の奥に響いたように美奈子には思えた。

沙夜ちゃんがいま啞くわえていた瞬間のサンドイッチ

になりたい、などという不埒な気持ちと、それを諫める痛みとが、ひとときに胸をよぎる。

ひとかけらを食し終えた沙夜が顔をあげるより早く、美奈子はさつと目を伏せておにぎりをぱくついた。好物のしゃけのまぶしごはんの海苔つきおにぎりなのだけど、いまはなんだかちゃんと味を感じることができない。

ただ、頬が火照^ほる^てよう^で、それでいてきりきりと背筋が冷たいよう^で。

数秒、ふたりとも無言のまままで時間が過ぎた。

校舎の裏側にある洋風の庭園は、土曜日も午後一時を過ぎたこの時間になるとほかの生徒たちの姿はみえなくなる。グラウンドから運動部の準備運動の掛け声や、音楽室から吹奏楽部の練習初めの音が聴こえてくるまでにはまだすこしあつた。

穏やかな緑の空間、美奈子には自分の心臓の早い鼓動だけが聞こえてくるように思えて。

「——今日——これから、どうしようか」

唐突な言葉が、長いその静けさをさえぎった。

美奈子の沈黙と緊張にさらりとすべりこむような、
穏やかな声。

「え？」

きよとんとした視線を向けた先で、沙夜ちゃんが
微笑みを浮かべている。

さつきまでの憂いの色の消えた——いや——

「お家に帰ってから、いっしょにどこかに遊びに行
くのと、きょうはひとりでいるのと。美奈子は、ど

ちらがいい？」

続いた問いに、美奈子は悟る。わかつてしまう。

幼馴染の少女は、憂いが晴れたのではなく。憂いをあえて隠して、たずねてくれていることが。

「あ——午後はうちもおばあさまが出かけていて留守だから、私の家に来るのもいいわよ。美奈子の家が大丈夫なら、お菓子をもって遊びにおじやまするのでも」

物静かな沙夜ちゃんにしては珍しく、短い間で言

葉が足される。

午後のふたりの選択肢を、組み合わせをひとつひとつ示してくれるかたちで。

「ひとりのほうがいいって言っても、まったくかまわないのよ。そういうふうなのだって、あると思うから。」

でももし、いっしょにいられて何か気晴らしができるのだったら、私も嬉しいかな、と思って」

きゅっ、と音をたてるのではないかというくらい

に、喉から胸の奥が震えた。

「さやちゃん……」

かすれてうわずった声が、唇からひとりでに洩れ出でる。

沙夜ちゃんに、自分のなかの変調をもう、とうに見通されている。そのことは、明らかだったのだけれど。

見通したうえで、沙夜ちゃんはこんなにも、優しく包みこむみたいなきづかいを向けてくれていて。

それなのに。

包みこむ手のひらの中に身を置く資格は、自分にはなかった。

これからの、今日の午後。ひとりでも昨日と同じようにぐるぐるしてしまおうし、もしもこんな気持ちのまま沙夜ちゃんとふたりきりで過ごしたら、どうなってしまうかわからない。

返答の言葉を、その最初の声を口にのぼらせることもできないまま、美奈子はうつむく。

木製の卓の上にまだ半分残った、お弁当の中身。

この乱調を隠すなら、徹底的に隠して、いますぐ笑みをこしらえておにぎりをぱくついてしまえばいいのだけれど、自分の口はほどけてくれない。

隠すこともできず、さりとてこんなにあさましくて見下げはてた欲望を、沙夜ちゃんに打ち明けて伝えることだつてできはしない。

わたしは、ただ、沙夜ちゃんに心配をかけ続けているだけで。

「美奈子？」

かすかに硬さを増した声が、名を呼んだ。

えっ？ と顔をあげて、沙夜ちゃんのはりつめた表情を見た——瞬間。

熱を帯びた頬を、すべりおちる雫の感触があつた。

あれ——嘘——泣いてる——わたし——

あわててまたたきをしても、こぼれてしまった涙がひっこむはずはなく。

どうにもならない数秒の沈黙の帳が、ふたりの間

に降りた。